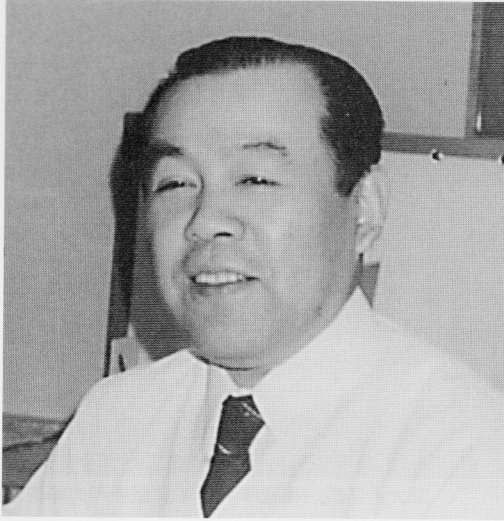


《特別企画》 卷頭インタビュー

57

(医) 聖光園 細野診療所 広島診療所 所長、山崎正寿氏に聞く！
五十八歳にして漢方歴三十年のキャリアと実績、
「浅田流漢方の真髄」を信念に現代漢方に挑む！



■山崎正寿 (やまさき・まさかず)

昭和19年、広島県生まれ。医学博士。昭和45年、京都大学医学部卒業後、同大附属病院にて内科研修。同47年、聖光園細野診療所に就職。同41年頃、医学部学生時代より細野診療所の細野史郎、坂口弘先生より漢方医学の指導を受ける。同50年、京都大学大学院医学研究科入学。四年間薬理学の研究、大学院修了後、学位授与。同56年、全沢市の映寿会病院副院長、三重大学医学部、富山医科薬科大学医学部などの非常勤講師を勤め、同60年、聖光園細野診療所・広島診療所を開設し、現在に至る。日本東洋医学学会評議員、和漢医薬学会評議員等。

中学、高校時代から内科医の父の行う鍼灸治療を目にして漢方に興味を抱き、京都大学医学部在学中に、浅田流漢方の流れを汲む聖光園細野診療所の細野史郎、坂口弘先生に師事された山崎正寿氏。氏は現在、その浅田流漢方の数少ない後継者のお一人でもあり、広島県の聖光園細野診療所所長として、日夜、漢方の臨床、普及に努めておられる。

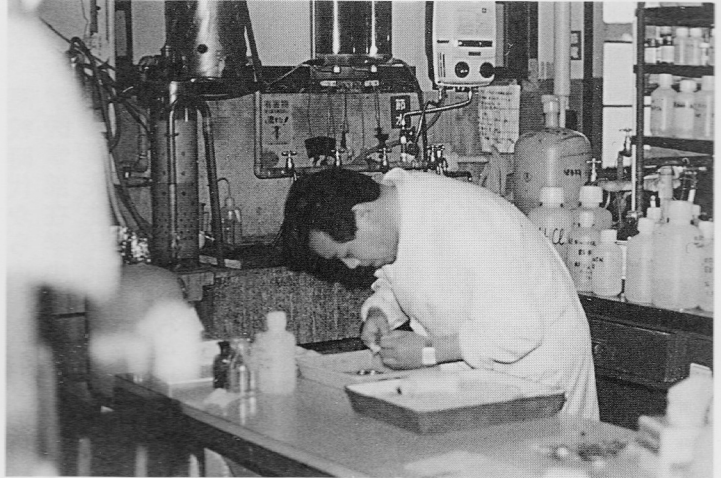
内科医の父の鍼灸治療に興味を抱く

本誌 山崎正寿先生は、いつ、どちらでお生まれになったのですか。

山崎 昭和一九年（一九四四年）の九月に広島県の三原市で生まれました。私の父は内科の医院を開業していましたので、そこで高校まで過ごし、昭和三九年に京都大学医学部に進学しました。

本誌 そうしますと、山崎先生は、子供の時からもう当然、医学の道へ進むもうと思われていたわけですか。

山崎 子供の頃はまだ漠然としていましたが…。ただその頃は、父親が病氣



京大大学院（薬理学）にて実験中の山崎先生

て、「面白そうだなあ」と（笑い）、いつしか関心を持つようになって医者になったというわけですね（笑い）。

本誌　そして京都大学医学部を卒業された。それはいつ頃ですか。

山崎　昭和四五年です。ちょうど卒業前は、学生運動の一番激しい時期で、三月の卒業が半年延期されて、九月に卒業しました。それから、その頃は研修医制度が始まったばかりでしたので、京都大学の附属病院の内科に二年間、研修に入りました。

聖光園細野診療所の門を叩く

本誌　山崎先生は、漢方の勉強はいつから始められたのでしょうか。

山崎　大学の教養課程にいた一年生の頃からです。当時医学部には学生だけの東洋医学のサークルがあつて、そのサークルで、西洋医学を学びながら、いろいろ漢方の勉強もしていたのですが、やはり本格的に勉強したいと思つて、昭和四一年頃に、聖光園細野診療

所の門を叩きました。

本誌　そうしますと山崎先生の漢方の師と言えば、やはり細野史郎先生だったのですか。

山崎　直接には坂口弘先生の指導を受けて、週一回（木曜日）二時間の勉強会を続けていました。当時、細野史郎先生が院長、坂口弘先生は副院長を務めていらしたのですが、坂口先生は診療の後で疲れておられたのですが、勉強会を開くだけさつていました。細野史郎先生も時々顔を出してくださつて、薫陶を受けましたね。中田敬吾先生や私の同級生もおりましたが、一緒に『傷寒論』、『金匱要略』を読んだり、『素問・靈樞』『難経』、その他幅広く学びました。そこで、かれこれ四年ぐらい勉強していましたね。

浅田流漢方の流れ

本誌　山崎先生は、平成一一年の当誌『月刊漢方療法』一・二月号の新春座談会「漢方復興の歴史を振り返り、明日

の漢方を考える」で、山田光胤、室賀昭三、秋葉哲生の各先生方と話されております。その中で先生は、細野史郎先生は浅田流漢方の後継者であると延べておられますが、浅田流漢方の流れについて少しお聞かせください。

山崎 そうですね。私どもにはあまり詳しくはわかりませんが、浅田宗伯先生には、たくさんのお弟子さんがおられて、東京のお弟子さんとしては、木村博昭先生、息子さんの木村長久先生の流れですね。関西には大阪に中野康章先生、京都には高弟の新妻莊五郎先生がおられて、木村博昭先生なども一度京都に勉強に来られたそうですね。新妻莊五郎先生は一乗寺に生まれて漢方をおやりになっていた。二代目の息子さんの新妻莊五郎（良輔）先生が同じ所で漢方をやっておられて、そこへ

細野史郎先生が勉強に行かれて、新妻家から浅田流の漢方というものを学ばれて、そして細野史郎先生の漢方になっていったというわけです。その他にも浅田宗伯先生の流れはいろいろある

と思いますが、大阪の中野康章先生の所からは森田幸門先生が出られて、亡くなった柴田良治先生が後を継いでおられた。ですから森田先生の跡を継ぐ方はいらっしゃらないのでは…。

本誌 東京の木村長久先生も戦死されていますね。

山崎 そうですね。まあ、木村濟世塾で木村博昭先生の薫陶を受けられた長谷川弥人先生にその流れが残っているかもしれません…。

恩師についての思い

本誌 細野史郎先生や坂口弘先生のお人柄についてはいかがですか。

山崎 両先生とも、漢方医学について

は非常に学問的で、シビアで、決して甘くないし、曖昧さありませんでした。こういうものであるという一つの考え方を持っておられました。細野史郎先生なりの漢方医学についてのお考えがありましたし、坂口弘先生もそ



山崎先生の師、細野史郎先生（中央）と坂口弘先生（右）、そして細野八郎先生（左）

うでしたね。きちんとしたそれぞれの先生の考え方の下で教えて頂いていましたね。恐いという意味ではなくて、非常に厳格に漢方について教えてもらった。それは弟子の私達にとってはとても幸せでしたね。今となっては、独学で漢方を勉強するよりはるかに良かったと感謝しております。両先生とも臨床を大切にされる先生でした。現代医学についても相当な経験と知識がお



第4回国際東洋医学会の貴賓室にて細野史郎先生（右端）と。中央が山崎先生、左端は史郎先生の奥様（昭和60年）

ありでしたから、その上に立った厳密な漢方をやっておられたのです。細野先生も坂口先生も漢方がまだ広く受け入れられないという不遇な時代に、漢方をやっておられたわけですから、確たる信念を持っておられましたね。本誌 何か当時のエピソードのようなものはありますか。

山崎 細野診療所には今はありませんが、一時入院施設があったのですが、入院患者さんの治療をする際に、不眠症の患者さんがおられて、その方に何をしようかと私は酸棗仁湯や黄連阿膠湯を考えていたのです。しかし、なかなか上手くいかなくて、細野先生にみて頂いたら「君、これは心中懊懣という病証だよ。知っているかね」と言われ、わからないと言うと「もっと勉強しなさい」と（笑い）。それには傷寒論に出ている「香豉と山梔の二つが入った梔子豉湯という処方が良い」ということで、早速、患者さんに飲ませたところ、すぐに患者さんが楽になったのです。その時に改めて、臨床や漢方

の勉強の奥の深さを思い知らされましたね。

本誌 現在の京都の聖光園細野診療所の所長はどなたですか。

山崎 細野史郎先生のご子息の細野八郎先生です。坂口弘先生は理事長だったのですが、先年引退されました。しかし坂口先生は、もうご高齢ですが、今でも週に一度、元気に診療をされています。

広島市の聖光園細野診療所について

本誌 この広島市の聖光園細野診療所について少しお聞かせください。

この広島市の診療所は、京都の聖光園細野診療所から許可をいただいて、昭和六〇年六月に開設しました。もちろん広島には漢方の先生もおられますが、広島というところは昔は別として近年は漢方の伝統が弱いところなんです。ましてや細野診療所は自費診療の漢方治療ですから、広島でやるのは大変難しいのですが、まあ何とか今まで



広島市の中央、八丁堀の聖光園細野診療所広島診療所が入っているビル（2F）の全景

やってきました。一般には漢方の自費診療というと、お年寄りばかりが来て、お年寄りのお守りみたいな漢方ばかりやっているのではないかと思われがちですが（笑）、私の所には赤ちゃんや子供などの若い患者さんが多いんですよ。働き盛りの人やその奥様とか、そういう方達は今の病院治療に対する批判と共に、まだ若いですから真剣に何か良い治療がないかと漢方を求めて

来院されています。病気の範囲はいろいろですね。

本誌 どのあたりから見えるのですか。

山崎 広島県はもちろん山口県、岡山県、九州、山陰、四国など、広い地域から来院されています。西には大阪の北浜に細野大阪診療所がありますからね。この広島診療所は、私と受付と薬剤師の三人だけでやっています。

本誌 使用さ

れる漢方薬はエキス剤ですか。

山崎 そうです。エキス剤と少し煎じ薬です。エキス剤は、ご存じのように、細野史郎先生達のご苦労されたものです。

細野診療所だけで使うものは他のエキス剤と違うオリジナルのエキス剤です。種類も数も多く、単味のエキス顆粒などもあつたりしますから、いろいろな工夫ができますので、我々の思うような様々なエキス剤を用いています。

印象に残っている臨床例

本誌 漢方には分野はないのですが、山崎先生がよく手掛けておられる疾患は何が多いですか。

山崎 そうですね。最近、皮膚科でも呼吸器科でもないのですが、やはり漢方治療として、特にアレルギー性疾患、喘息とか、アトピー性皮膚炎とか、鼻炎とかが多いですね。多くの患者さんを診ていますし、それについてもいろいろなやり方を工夫して、治しますけどね。

本誌 その中でも特に強く印象に残っている臨床例をお聞かせください。

山崎 一つは、私が学生時代に経験した症例で、これがきっかけで漢方をや



細野八郎先生(左)と山崎先生(右)(第42回日本東洋医学会にて、平成3年)

ついでいこうと決断した症例でもあるのですが、ネフローゼ症候群の膜性腎症(特殊な免疫異常によるネフローゼ症候群)の四十代の男性の患者さんで診た。私が主治医になって大学病院で診ていたのですが、大学病院ですから現代医学的な治療をやっています、随分きつい薬(ステロイドやクロロキン

という失明するような副作用もある薬)を使っています、患者さんがとても苦しんでいました。血液の蛋白が減ってきて、ひどくなってくる。そのきつい薬を使っても良くならず、患者さんから「大学病院で治療を受けても良くならないような治療は受けたくない」と、新人主治医の私にそう言ったのです。私の指導医に相談しても「現代の治療法ではその方法しかない」と言われ、患者さんには幾度も文句を言われるし、泣きつかれるので往生しましてね(笑)。ちょうど私は漢方を勉強し始めた頃でしたので、患者さんに内緒でこっそり「漢方を飲んでみるか」と聞いてみたら、患者さんも「何でも良い、飲む」と…。そして漢方の診察をすると、八味丸の証で、臍下不仁があつて尿が出難くて、足が冷えて、腰が痛くて、色が黒くて…。臍下不仁というのは、下腹に力がなくて、ふにゃふにゃな状態ですよ。患者さんには、公にしないで飲んでもらい、ひと月も

しないうちに患者さんは喜んで「先生!おしっこが気持ちよく出るようになった、むくみも取れた、体が元氣になってきた。こんなこと今までなかったよ」と飲み続けてくれました。ステロイドも使わなくなつて、退院して、外来通院だけになりました(笑)。私は、それを見て、難渋している病気に漢方薬がこれほど力を発揮できるのなら、これから漢方をやっつていこうと、その時に決心したわけです。もしそれがなかったら、今こういう所へ来ていなかったかもしれない(笑)。まあ、八味丸の典型的な例で、完治したというわけではありませんが、その後元氣に、細野診療所へも通院されていきましたね。これが私の忘れがたい最初の症例です。

本誌 今日、山崎先生があるのは、その症例のおかげなんです(笑)。そのほかには何か…。

山崎 最近では、アトピー性皮膚炎のひどい二十代の男性の患者さんなんです、ステロイド剤を使っても治らな

った臨床例です。

好きな処方はい逆散加減、五積散加味

くて往生していたそうです。とある薬局の患者さんなのですが、私の所で診て欲しいと依頼がありましたね。「あなたが治せないのに私が治せるかどうか分からないよ」って言いながら…(笑い)。その患者さんは治療というものに対して、不信任に満ち満ちていましたね。顔から汁が垂れているんですよ、全身真っ赤になっっているし…。それを診て、一所懸命治療したら段々と少しずつよくなってきた、そうすると患者さんも気分がよくなるのか、ハキハキ物を言うようになってきました。未だにちよこちよこ漢方を飲んでいますが、全く健康な普通の肌になりました。

本誌 処方は何だったのですか。

山崎 その処方、黄連解毒湯合四物湯と葎甘散じゅうかんさんです。この葎甘散は学会でも発表していますが、湿熱や痒みをとる薬です。これは私以外の人はほとんど使わないでしょうね。細野診療所では使われますけど、他の所ではまず使われませんね。これが最近の印象に残

痲気症候群、冷えとか、腹痛、腰痛とかによく使いますね。

浅田宗伯先生の教え

本誌 山崎先生のよく使われる処方、お好きな処方は何でしょうか。

山崎 やはり、よく使うのはアレルギーーとしての黄連解毒湯合四物湯をアトピーなどに使っていますね。しかし私が好きな処方は四逆散類です。四逆散は柴胡剤ですね。これは抑鬱に対して面白い処方なんです。今日の世の中にはこの四逆散に類する病証が多いと思います。四逆散には加減法がいろいろありまして、多彩な処方があります。例えば、柴胡疏肝散、疏肝湯、曼倩湯まんせいとう、柴芍六君子湯、四逆解毒湯などですね。

四逆散は柴胡、枳実、芍薬と甘草の四味からなるものですね。もう一つ好きなのは五積散です。五積散は、最近亡くなられた矢数道明先生が、昔、論文を発表しておられます。それを更に踏襲して私なりの五積散の病証について書いた論文もありますが、それ以来、

本誌 山崎先生のモットーとされていること、お好きな言葉、信念などを聞かせてください。

山崎 やはり浅田宗伯先生の『橘窓書影』の中の言葉が好きで、私の医者としての信念にもしています。「夫れ術の精ならざるを憂えずして、徒に病の治し難きを憂うるは、天下の拙医なり」、文句を言わず、自分の術を精密に磨けという意味ですね。

もう一つは「丁雄飛曰く、医人の司命たるや、謀を為して忠ならざるには仁術に非ざるなり。誠に済人の心有らば、又何ぞ煩瑣を憚らんや。況んや病者は水火鑪中に有り、安んぞ粗浮を以て之に応ぜんや」、病者は火にかけた鍋の中の水のようなもので、非常に苦しんでいる。そういう人に対して粗末な治療や粗末な対応をしてはいけません。面



細野史郎先生米寿祝賀会での山崎先生（右から3人目、昭和62年）

倒がるようではいけないという意味です。自分の術をしっかりと磨けと言うのが浅田先生の言葉ですね。やはり浅田宗伯先生のお言葉にありますように、難しい患者さんもありますが、自分の技術を磨かないと患者さんは信頼してくれないし、治療を上手くすることができませんよね。また、この前みたテレビでオムロンの会長さんが言っていた

言葉ですが、「プロは常に自分の仕事についてを考えている、素人は忘れてる」、プロは寝てもさめてもそのことばかりを考えて、工夫しているというものですが、私もその通りだと思います。漢方もそうだと…。

本誌 寝ても醒めても漢方のことを考えて工夫することが大切であると…。

初学者への言葉と趣味・健康法

本誌 山崎先生から、漢方初学者への何かアドバイスを。

山崎 そうですね。やはり『傷寒論』をきちんと学ぶことです。それが出来ているか、出来ていないかでその人の漢方の力が評価できると思います。難しいと言わないで、真剣に『傷寒論』を理解して、臨床に活用できる人が本当に漢方ができる人です。基礎がない人は、漢方薬が使えなくなったり、嫌になつたりすると思います。傷寒論の基本的な考え方は『傷寒弁術』に書いてありますから、難しいからとか泣き

言は言わないで、しっかりと勉強していただきたいですね。

本誌 最後に山崎先生のご趣味と健康法をお聞かせください。

山崎 漢方薬の薬草を見て回ったりするのが好きです。広島県の山にもいろいろあるのですが、黄連、柴胡、竹節人參、黄柏、金銀花、升麻などもありますし。広島県は昔から薬草が多いんですよ。一人で行くわけではなく、薬草園の園長さんなんかともよく行きますね。広島県では年に一回、薬草観察会があります、一般の人を集めてね…。薬草観察も時間がないので、日曜日ごとに行くわけにはいきませんが…。あとはスイミングを定期的にやっています。スイミングクラブに入会していますので：（笑い）。

本誌 本日はお忙しいところ本当にありがとうございます。ありがとうございました。